

## 星の花

文と絵

### 柴岡治子

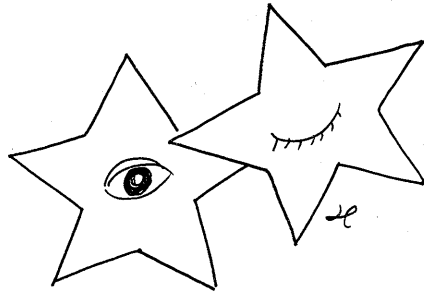
おばさんはその花を、星が空から落っこちて咲いたのだと思いました。

まだ小さかった、ようちえんに通っていた頃のことです。広い広い野原のむこうに、ようちえんのお友だちの家がありました。何人いたのか覚えていませんが、四、五人、お友だちのお誕生日かなにかに、およばれたような気がしています。その帰り道、少し夕方になって、なんとなく淋しいような感じが野原にひろがっていたようでした。

ふっと心が立ち止まるような気持ちの時、幼なかつた頃のこと、一つの凝結したイメージとして何時も一瞬私をとらえます。

そんなものがいくつもいくつもあって、ある時、これもまたふっと書きはじめたら、小さな結び目を沢山持った毛糸のように、あとからあとからつながって来るのです。

その小さな結び目のようなものが、ここにおはなしになりました。



お家では、お父さんとお母さんが待っているだろうなあ、そんな気持ちもしていたようです。はげちよろけの原っぱの草の中に、ポツン、ポツンと小さな小さな、むらさき色の花が咲いていました。むらさきととっても花びらは、白地に細い細いむらさきの線が何本もあって、なんとなくむらさき色にみえたのでした。それを見た時おぼさんは、星が空から落ちこちて咲いたようにどうしてか思えて、ドキドキしました。

星の花、あとになっておぼさんは、それを自分の家のお庭にも植えました。その花を見るたびに遠い日の、広い野原の、薄い夕やけの色や、かすかな風や、星の花と思った時のドキドキした気持ちを思い出します。

でもこの頃は、少しも星の花に会うことがありません。植物名は何と言うのかしらべればすぐわかると思いますが、おぼさんはそれを、今でも「星の花」と言うことにしています。